

待降節 説教

主がこの場所におられるのに

＜創世記 28章 10～16節＞

李珍容 牧師（豊田めぐみ伝道所）



ヤコブが父と兄を欺いた後逃げ、おじがいる「ハラン」と言う所に行く途中夜になりました。ヤコブは石を枕にして寝ました。寝入った時、夢の中に階段が現れ、それは先端が天まで達しており地に向かって伸びているものでした。

ヤコブの以前に創世記11章の人々は塔と町を建てながらいました。『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』この人々の計画は失敗しました。多くの人々が力を合わせて塔のある町を建てましたが、その先端が天に達することはませんでした。

しかし、ヤコブの夢の中に出了階段は創世記11章の塔と異なりました。

主なる神様はヤコブの夢の中で先端が天まで達する階段を見せてくださいり、神様の御使いたちはその階段を上ったり下ったりしました。これは天と地が繋がれたことを言う表現です。

自分たちの力を通して天に届こうとした者たちの努力は失敗しましたが、主なる神様は天と地を繋げて「ヤコブ」とお会いしてくださいました。

聖書はこのように我々とお会いしてくださる神様の話で満ちます。

この出会いは私たちの努力によるものではありません。その出会いは神様が自ら探して来てくれる出会いであります。

天で、民の叫びを聞き彼らを救ってくださり山でお会いしてくださったように、その民と共に暮らすために荒れ野の幕屋に留まってくださったように、時間と空間の限界の中に肉体に備えられ人間の姿で探して訪れたように、そして今も「靈」として我々と共に居られているようです。

このように我々に訪れてくださり、私たちにお会いしてくださり、私たちと共にいてくださる神様の驚くばかりの贈り物を「恵み」と言います。

ヤコブが石を枕にして寝入った時、主なる神様が傍に立ち、ヤコブに約束を与えてくださいました。その約束はヤコブのお祖父さんであるアブラハムにしてくださった約束であり、父であるイサクにしてくださった約束であります。

『あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える』『あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう』『地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。』『わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。』『あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。』（創世記28:13-15）

主なる神様が与えてくださったこの約束の内容は心を躍らせる内容です。しかし、その約束が果たす時は、いつごろであろうかわからない将来のことであります。信徒はその将来の約束の前で、見えない将来に対する希望を持って忍耐するのか、そうではなく今目に見える現実だけに反応しながら生きて行くのかを選ばなければなりません。

今、私たちが経験する現実、苦難、悩みは具体的であり明確です。しかし、まだ我々に來ていない明日と将来は、不明確で

遠いものです。そして、私たちは将来に対する「希望」を持つより、現在に受ける「償い」を願いながら生きているのではないでしょうか。

ヤコブも同じです。神様はアブラハムとイサクにしたと同じように「将来に対する大きい希望」を約束してくださいましたが、ヤコブは差し当たりに家に帰ることに集中しました。そして、将来に対する約束の中に「神様が共におられる事」、「旅路を守ってくださること」、「食べ物、着る物を与えてくださること」そして「無事に父の家に帰らせること」に集中しました。そしてこの内容を前提で神様に誓願しました。

私たちの現実的な問題を神様に任せて祈るのは間違ったことではありません。これも何より必要です。しかし、信徒は差し当たり自分に必要なこと、現実的なことだけに集中することより「希望」に関することも共に考えることが望ましいと思います。

もちろん、現在に経験する具体的な苦しみと悩みのために、不明確な将来について希望を持てず道に迷うときもあります。

そのような時、過ぎた日々を顧みる必要があります。顧みるとき、私たちの人生に残っている神様の御恵みの跡を発見する場合があるからです。その時は厳しかったが、その時は苦しかったが、それにもかかわらずその時を過ごして来るようになってくださいった神様の御恵みが、たとえ今は将来が見えず不明確だとしても、相変わらず私たちと共にあることを信じることができます。

その時その場で、私たちの傍に立たれ、私たちに約束してくださいる神様の御恵みを悟ることができます。そのように私たちの過ぎた日々に残っている御恵みの跡を覚える時、今の苦しみを乗り越える力を受け、将来を希望する力を見出すことができると思います。

眠りから覚めたヤコブは言いました。

『まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかつた。』（創28:16）

この言葉は文字通り「神様はこの場所におられるのに、わたしは知らなかつた」と言う場所的な側面で考えて見ることができますが、「神様がわたしと共におられるのに、知らなかつたです」と言う関係的な側面で考えて見ることもできると思います。

見えない神様を信じるのが「信仰」であるように、その見えない神様を信頼しながら不明確な将来を希望することも「信仰」であります。

ルカによる福音書を見ると、エマオと言う村へ向かって行く二人の弟子が、復活されたイエス様と同行する話があります。初めに二人の弟子は復活されたイエス様が誰なのか知りませんでした。しかし、主が分から合ったパンを食べ、御言葉を聞いた時、目が開けその方が主であることを悟りました。

待降節の時、御言葉を通して私たちに来られて、共にいてくださる神様を悟り、覚えて、今日を耐え、将来を希望する信徒として生きて行きましょう。

サンクスフェスティバル開催

「シャローム！今こそ平和を築こう！」主題に

関西地方会青年部・壮年部・女性部3部共同主催の第11回サンクスフェスティバルが、10月30日（主）午後3時より大阪教会で開かれた。

今回は「シャローム！ 今こそ平和を築こう！」という主題にした。今年はウクライナにロシア軍が侵攻したため世界の平和が脅かされており、神様の平和の御国を築こうとの思いでタイトルを決めた。3年続いているコロナ感染により3年ぶりの開催となった。まだコロナが完全に収まっておらず対面およびYouTubeによる映像生配信のハイブリッド形式で行った。12教会から86名が参加し、主の導きに感謝して共に恵みあふれる時間を持った。

第一部開会礼拝では、裴貞愛牧師（枚岡）が、「回復と平和」（サムエル記上7:3～14）という題で説教した。

第二部では、加古川バプテスト教会の梅谷悟牧師が講演を行った。牧師の働きを48年間されてこられ10名ほどの開拓教会から500名を超える大教会に成長した経緯が説明された。併設の介護施設、チャーチ・スクールおよび海外に宣教師派遣・支援について写真を見せながら話をした。

第三部では若松裕子姉妹（川西）がフルート、父親の三原啓史（バイオリン）、母親の三原晴恵（ピアノ）が共に演奏した。若松さんの証もあり、参加者一同も賛美をしながら喜びと感謝の気持ちで会がしめくられた。
（報告：関西地方会壮年部）



オンライン異端セミナー開催

統一教会と政治との関係から見える宣教課題

宣教委員会主催の異端セミナーが10月28日（金）午後7時から午後9時30分までオンライン形式で開催された。主題は、「統一教会と政治との関係から見える宣教課題」、講師は、卓志雄司祭（日本聖公会東京教区インマヌエル新生教会主任司祭）であった。総会内外から56名の教役者と信徒が参加した。

プログラムの進行は、宣教委員である張慶泰牧師（船橋教会）の司会、金仁果牧師（福岡教会）の祈りに続き、委員長である趙永哲牧師（大阪北部教会）が簡単な挨拶と講師の紹介、そしてその後の進行を担当した。異端による被害者家族でもあった講師は使命感を持ち、多くの資料を提示しながら80分間の熱い講演をして下さった。今回開催された異端宗教に関するセミナーは宣教委員会がこれまで準備して来た異端宗教の警戒と対策に関する一部分として、特に最近日本社会において大きな社会的、政治的なイシューとなっている統一教会の問題を正しく学び、私たちに与えられた宣教の使命を再確認することが主な目的であった。講演後の質疑応答の時間には統一教会や政治との関係、また、宣教の課題についての質問と応答が活発に展開された。最後に、宣教委員長の趙永哲牧師による閉会祈祷をもって異端セミナーを終了した。

（報告：趙永哲牧師）



創立70周年記念礼拝開催

祝賀讃美祭として160余名が参加

関東地方教会女性連合会の歴史をさかのぼってみると、1953年東京教会で4つの教会総会員84人が集まって「婦人会京浜地方連合会」という名称で第1回創立記念礼拝をささげたことが「50周年記念誌」を通じて知った。その後、1976年本会の名称を「婦人会関東地方連合会」に変更。再び1994年に名称を現在の「関東地方教会女性連合会」に変更し今日に至った。

70年の足跡を振り返ってみると、最も弱い信仰の先輩たちの涙の祈りと献身の実り、そして主の導きによって、今までの私たちを見守ってくださった神様に感謝と栄光をお捧げたい。

2022年11月3日（木）関東地方教会女性連合会創立70周年記念礼拝と祝賀讃美祭が10教会、160人ほど参加して行われた。

記念礼拝には関東地方会女性部長の李惠淑牧師が、「平和を創る女性」という題の説教、郭恩珠牧師の司式による聖餐式が行われた。来賓紹介、祝辞、祝電披露に続き、色々な形で各教

会女性会讃美チームの讃美で神様への情熱で愛を共有し、女性連合会委員方たちの「恵みなしには」の特別讃美を通じて聖靈の熱い導きと讃美歌詞のように完全な十字架の愛で、主の力によって私たちと共におられた神様に栄光と讃美を捧げ、恵み溢れた讃美だった。

関東地方教会女性連合会創立70周年記念行事のため会場として提供してくれた東京教会堂会と放送の奉仕をしてくれた信徒の方、参加した皆に献品を通じてプレゼント提供してくれた方、見えない所で奉仕した皆に感謝する。

（報告：関東地方教会女性連合会24代会長朴英遠）



2023年度 宣教師・神学生研修会案内

在日大韓基督教会に加入する宣教師と、神学校を卒業し伝道師考試を受験する方のために研修会を実施します。

●日 時：2022年2月26日（主日）17:00～3月4日（土）12:00

●場 所：オンライン（ZOOM）

●履修課目：KCCJ神学・宣教理念、憲法・規則、在日同胞史、KCCJ歴史、日本教会史・神学、エキュメニカル神学、KCCJ牧会・礼拝・礼典・説教など、総会行政・年金・福祉など日本生活全般

●詳細は総会事務局に問い合わせください。（総幹事080-4377-3927）

在日総会神学校理事長 金日煥長老、校長 鄭然元牧師

子どもの食堂を開設して地域とつながり、地域宣教に励んでいる
日本基督教団三津教会をご紹介いたします。

特集

「三津教会・教会こども食堂の働き」

日本基督教団 三津教会 牧師 森分 望



私の仕える日本基督教団三津教会は、愛媛県松山市の郊外の港町にあります。

米国南メソジスト教会の宣教により1907年に講義所が開設されて以来、今年創立105周年を迎えました。開拓伝道をした米国南メソジスト教会の宣教師は、三津がどんなに伝道困難な地であるかを報告していますが、1889年の三津への宣教の開始から会堂が与えられるまで50年以上、店の軒先など転々としながら礼拝を続けていた歴史はその困難さを物語っています。この三津の地で今も福音が宣べ伝え続けられ、神の語りかける声が響き続けていることに畏れと感謝を持って仕えています。

2013年に三津教会に赴任して以来、教会全体で「どんな教会になりたいか」話し合いを続けてきました。これまで皆、懸命に教会に仕えてこられましたが、いつの間にか50年、60年と慣れ親しんだ教員とその子弟が集い、他を受け入れ難い膠着した状態になっていました。「もっと交わりがほしい。地域に開かれた温かい教会でありたい」これが教会の願いでした。どうすれば開かれた温かい教会になっていくのか。試行錯誤が続きました。そのような中、礼拝に「ある宗教でトラブルに巻き込まれた。自殺しようとしたが死にきれずに困って教会に来た。助けてほしい」と一人の方が来られました。その後、トラブルは解決に向かい、その方は毎週礼拝や諸集会に出席していましたが、生活が厳しくて食べられない上、障害のため字が読めず「礼拝もお祈りの会も聖書研究会も難しくよくわからない」と困っておられたことがわかりました。教会には何ができるのか？一人の方を通して教会が福音をどう捉えているのか、誰のための福音なのか問われた出来事でした。

「もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい』というだけで体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いか伴わないなら、信仰はそれだけで死んだものです。」(ヤコブ2:15～17)

イエスの福音は、飢え貧しい人、悲しんでいる人、神の愛からは遠いと思われていた人、そしてこの私たちの間に、救い(愛)の実感と体験と共に訪れたのではなかったか。キリスト者一人一人が礼拝の恵みに押し出されて歩むとともに、教会自身も福音の実りの温かさと働きを豊かに持つ教会でありたいと話し合いました。そこには形骸化した共同体への反省と痛みがありました。改めて教会と周囲の状況を見渡してみると、地域の交流は希薄化し、高齢の方たちは孤食で、ご近所では孤独死が続いていました。「神は愛です」と宣言しながら、教会のすぐ

隣で孤独死される方には無関心で交流がないことに胸を痛めました。また、シングル家庭は経済的にも時間的にも精神的にも追いつめられていました。日本の子どもたちの7人に1人は貧困といわれる状況がありました。

話し合いを重ね、創立100周年に聖霊の導きによって「地域と共に歩む開かれた教会」となれるよう全会一致で教会こども食堂を始めることを決議しました。

2019年1月。「教会こども食堂」と名前をつけてこども食堂を開店しました。1回目のメニューは教会お得意のカレーライスやサラダ、手作りのゼリーです。ご近所へのビラ配り、地域包括支援センターへご案内を出しただけの開店でした。スタッフは教員10名。本当に人が来てくれるのか心配しながらの開店でしたが、やがて子どもたちの賑やかな声が聞こえ、準備したカレー50食は完売しました。食後は、季節のクイズやじゃんけん大会など和やかにひと時を過ごしました。

超高齢化の教会にこども食堂が続けられるか心配しましたが、沢山の人の食事を心を込めて作ること、賜物を活かして働き分かち合うこと、共に寄り添い生きること、これらはどれも教会が日頃から行ってきたことで、こども食堂は、今までつかれてきた共に生きる教会共同体の経験を生かし、外に向けて広げていくことのできる働きだと感じています。

現在、教会こども食堂は、月に1回。月の最終金曜日の5時～6時半まで開店しています。参加費大人300円、こども(18歳まで)・大学生は無料です。今では、毎月130名～150名の方々が参加しています。ボランティアの方も教員を中心にミッションスクールのYWCAの生徒さんたちや地域の方たち30名～50名が参加してくださっています。ボランティアから礼拝に参加される方や受洗者も与えられています。

コロナ禍、生活に困窮する方が増えたためにはじめたフードバンクも大きくなりました。毎週水曜日・金曜日の13:00～18:00まで企業やスーパー、農家から提供された食品を市内19のこども食堂、20の福祉団体、困窮世帯約80世帯200名の方に食品の提供を行っています。この働きの中心にキリストが共にいてくださることを願いつつ賑やかな忙しい毎日が続いています。



2023年度 牧師・伝道師考試及び宣教師加入考試

「2023年度牧師・伝道師考試及び宣教師加入考試」を以下のように実施します。詳細の案内と請願書などは総会のホームページ(<http://kccj.jp>)をご参照ください。

一. 日 時：2023年3月14日(火)

- ・09:00～オリエンテーション
- ・09:30～19:00(筆記試験・面接)

二. 場 所：在日大韓基督教会 大阪KCC

三. 申請(書類提出)：2023年2月14日(火)(必着) 総会事務局
四. 提出先：総会事務局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-55

電話番号 (03)3202-5398 FAX (03)3202-4977

神学考試委員会

委員長 朴栄子、書記 韓世一

(問い合わせ TEL 090-1907-2613)

<第11回WCCカールスルーエ総会参観記>(3)

—キリストの愛が世界を和解と一致へと動かす—

総会期間中の土曜日と日曜日は、参加者それぞれがどのように過ごすかを選択することができた。参加者には、カールスルーエとその周辺にある教会の住所と礼拝時間の情報が共有され、それぞれが自由に礼拝に参加できるように配慮されていた。カールスルーエにある教会全体が教派を超えてWCC総会参加者を温かく迎えてくれている、という印象を受けた。加えて、「週末巡礼プログラム」(Weekend Pilgrimage Programme)も用意されていた。土曜日と日曜日、合わせて75ものプログラムがあり、参加者たちは事前に第2希望まで行き先を選択し応募することができた。プログラムはほとんどが日帰りのプランであったが、中には一泊二日のものもあった。プログラムの一覧表を見ると、複数の国境に面しているバーデン地方の特性を活かして、ドイツ国内だけでなく、フランスやスイスなどの隣国を訪れるものもあった。そして各プログラムの紹介文を見ると、地域ごとに異なる宣教課題があり、その地に置かれた教会がエキュメニカルな形で共に働いていることを学べる内容となっていた。こうしたプログラムの一覧表を見ながら感じることは、これを実行するためにどれだけ多くの準備期間とボランティアたちの協力があったのか、ということと、WCC総会のためにバーデン地方の教会が一丸となって協力している、ということであった。

それぞれのプログラムへの応募者が多い場合は抽選になるので、必ず参加できるというわけではなかったが、幸い、私たちにも参加の機会が与えられた。

私たちが参加したプログラムの一つは、ドイツのハイデルベルクという街を訪れるものであった。はじめにハイデルベルク大学を訪問し、大学病院のチャプレンと地域教会の関係について、特にキャンパス内でなされているエキュメニカルな「パストラル・ケア」(Ecumenical clinical pastoral care)の話を聞くことができた。その後、旧市街へ移動し、Jesuiten教会と聖霊教会(Church of the Holy Spirit)を訪れた。両方とも非常に長い歴史を持つ教会で、その美しく荘厳な礼拝堂を訪れる観光客も多く見られた。これらの教会は、街の中心部に位置しており、地域住民を牧会的に支援するために様々な取り組みを行っていた。聖霊教会を訪れた際には印象深い話を聞くことができた。聖霊教会の牧師は、教会堂に入って最初にあるステンドグラスを正面に立って眺めるように促した。そのステンドグラスには「6.8.1945」という日付と、赤く壊れていくような球体、その右上には「E=mc²」という式があつた。そして牧師はそれが原爆投下を意味する作品であると説明し、これはただ歴史的な出来事を伝えるためだけではなく、今を生きていく私たちに対する警告であり、そこにある神の言葉に絶えず耳を傾けなければならないと、熱く語った。

また、別のプログラムを通してアヘン(Achern)という地域を訪れる機会も与えられた。アヘンは、ライン川沿いにある小さな町で、主にプロテスタント信者によってコミュニティが形成されていた。この町の宣教課題は、難民の受け入れであった。プログラムに参加した日は、日曜日だったので、アヘンのプロテスタント教会での主日礼拝に出席した。電車の遅

延のため、プログラム参加者たちは、礼拝開始時刻よりも遅れて到着したが、教員たちは、世界教会からのゲストのために待ってくれていた。礼拝は、二人の女性教職によって導かれていた。一人はドイツ人の牧師で、もう一人はナイジェリア出身の牧師であった。ドイツ人の牧師は、ドイツ語で司式をし、ナイジェリア人の牧師は、英語で司式と説教をした。礼拝の出席者には、ドイツ人に加えて、ナイジェリアや他の国と地域から難民として来た様々な人たちがいた。そして彼らが初めて教会を訪問する私たちを心から喜んで迎えてくれていることを、礼拝全体を通して感じることができた。礼拝後のランチでは、教員たちがそれぞれ自分の出身地の手料理を振る舞ってくれた。教員の代表は、難民として来た姉妹兄弟は、支援の対象ではなく、このコミュニティに貢献し、誰かをもてなすことのできる人たちであることを伝えたいと語っていた。

次に訪れたコミュニティセンターでは、アヘンの町に来た難民には、大人にも子供にも、自転車が提供されるという話を聞いた。提供される自転車は新品ではなく、壊れたものを修理してきれいに磨いたものである。私たち参加者を案内してくれたボランティアの一人は、内陸のドイツにおいて自転車は、自分の思いのままにどこまでも行くことのできる「自由の象徴」であると語ってくれた。難民としてアヘンに来た人々は、その自転車に乗って生活をし、徐々に地域の一員として受け入れられていく。また難民には、希望すれば自転車を修理する技術を身につける機会が与えられる。これは生活費を得るための手段ではなく、地域社会にボランティアとして貢献するためである。こうしたアヘンの町全体の取り組みとその中の教会の役割を見ながら、ドイツという国家としての難民受け入れは、こうした地域社会の働きによって支えられているということを感じることができた。日本も韓国も、まだまだ難民支援には否定的な声が多いが、まず何よりも必要なことは、国家の政策以前に、市民たちが、キリスト者一人ひとりが難民を顔の見える自分の隣人として考える必要があるということを痛感させられた。

(報告: WCC総会参加者一同)

